碇の男

いかり

西村寿行

JUKOH NISHIMURA

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

KOKUMA

TOKUMA NOVELS

西村寿行
碇の男

発行者　松下武義
発行所　徳間書店
東京都港区東新橋一ノ一ノ一六　〒一〇五－八〇五五
電話〇三・三五七三・〇一一一
振替〇〇一四〇－〇－四四三九二

©Jukô Nishimura 2001 Printed in Japan

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当　高田暁郎〉

ISBN4-19-850528-4

NISHIMURA
HARD-ROMAN SERIES

傑作ハードロマン

碇(いかり)の男

西村寿行

徳間書店

TOKUMA NOVELS

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

碇(いかり)の男　7
影なき男　75
刑事　125
人間鳥(にんげんどり)の邑跡(むらあと)　185

碇（いかり）の男

「能海十蔵さんで、いらっしゃいますね」
新宿駅から地下広場に出たばかりの能海にその女は声をかけてきた。
雑踏を縫って能海の前に出て、女はそう声をかけた。向かい合ってとなる。三十なかばの年頃と能海はみる。ほとんど女に縁がないといってよい能海には際立ってきれいにみえた。
そうですがと、答えた。とりあえずはだ。いいことというのは、起こるはずはない。よくないことというのはこのところの日常がそうだが、相手を女刑事と思うほどのよくないことは、能海はやっていない。どこかの出版社の編集者との想いも掠めないではなかったが、おそらくそうではない。そうなら、あるいはわずかばかりの幸運に出遭ったということになるが、そういうことが自分には起こらないことをこのところの能海は自覚していた。
「わたし、街村葛と申します。市街地の街に村に葛なんて、とても変なんですけど……」
葛の双眸は柔らかいものを浮かべていた。
「いえ、そうは、思いませんが……」
わけがわからないから応じようがない。それにその前に能海は葛と名宣った女の笑みに魅せられるというか、惹きずり込まれて、早くも腑抜けとなりかけていた。何かが舞い下りた気が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

した。何かは機会だ。生まれてから死ぬまで大都市の雑踏をさまよい歩き続けてもこういう機会に遭遇することはまず無い。確率でいえば何十億分の一といえよう。機会の中身は窺い知れないが。だが、艶はある。彩りがある。希みを喪ってただ人の世を徘徊しているにひとしい中年男にとってはだ。

「あまりにも唐突で、驚かれているでしょう。お詫びします」

また、いえ、と口にしかかったが、能海は抑えた。

口調は多少は改まったが葛の笑みはそのままであった。能海は葛のつぎのことばを待つことにした。舞い下りた機会だと思うさもしい精神を覚られてはなるまい。葛は能海のすべてを調べ上げた上でここに立っている。直接の関与に出たのだ。能海には吉凶は問題とはならない。吉はあるいはないかもしれないが、凶となってもどうということはない。およそ失うものが無いのだ。失うものの無い中年男というのは関わることのあまりの無さに自嘲の海に溺れているのが常道である。

「わたしどもにとっては、ひじょうにだいじなお話があって、失礼は承知で、お目にかかりました。あの、近くのホテルでのお食事は、いかがでしょうか?」

「いいですよ、時間はありますから」

ハードボイルド風にと思ったが、装うことばを持たない。だが、それは先方が持っている。わたしどもと来た。複数。組織。ひじょうにだ

いじと。高額の謝礼・報酬がにおう。女体も。謀略も。なんでもいい、何かに深く関与できるのなら。

生ビールからはじまった。

葛の、いかがですかとの勧めであった。つゆの終わろうかという季節だが生ビールはうまかった。もっとも、能海はアルコールならなんでも性に合う。軽く干して能海は二杯目をたのんだ。髭や物の翳の伸びるという午後の三時あたりであった。勘定はとうぜん、葛の背後の組織が持つものと決めているから能海に屈託はない。つづいて葛もおかわりをした。葛は能海の眸をみつめたりメニューに視線を落としたりしている。笑みは消えたり出たりしている。切り出す間合いをみている。謀略から派遣された要員にしては、もたつきがみえる。ま、いい。お好きなお飲物をといわれている。すぐに生ビールからバーボンに切り替える。御意はよしである。能海のあくどいまでに飲む様をみれば葛に間合いは必要でなくなる。ただし、葛から艶と彩りは消える。あるのは蔑視。ただ酒にありついた男の醜さ——だが、そんなことは先方は承知の上で出て来ている。すべてを調べ尽くしているのだ。

「車には、お乗りですか？」

「昔はね」

本題かどうかはわからない。生ビール二杯は数分で干して口を拭う暇もなくバーボンに切り替えたところで、葛は尋いて来た。裡にある狼

狽を隠して。だが、眉を顰めたりの露骨なものはみせなかった。車など持つ余裕のある身分でないことは承知しているのだから本題のうちかもしれない。

「狩猟とかクレー射撃とかは、ご趣味でしたかしら？」

「街村、葛――さんでしたね。わたしは遠慮なくご馳走になっています。あなたも遠慮なさらないで。小出しでなくともいいです」

能海は興味は充分に懐いている。というよりは何事か――それも重大であるほどよいのだが、そういうことの起こることへの期待が膨らんでいた。出来すれば、時間をかけて葛と論じ合い、詰めていく。深く。どうでもいいようなことから小出しにきかれるのはあまり愉快なことではない。小物扱いという気がする。もちろん、大物ではあり得ないが……。

「では、おことばに甘えるわ」葛が能海に視線を据えた。笑みは捨てている。「十三年前のことをうかがいたいのです。一九八七年の三月十八日午後三時二十分――能海さんに記憶はございますか？」

「そりゃまた、なんとも、突拍子もない……」口にしかけたバーボンを能海はテーブルに戻した。「いったい、なんのことです？」

「記憶、ございませんか？」

「記憶にも何も――だいたいね、おれはね――しかし、そんな、あなた……」

能海はわたしからおれに戻った。あわて気味にバーボンを口に運んだ。だれにしろ、からか

いでこんなことはしない。悪意でも。葛の眸には深い意味が沈んでみえる。視線を離さない。しかし、あまりにも異様な、意表を衝く問いかけであった。

時効——そのことばが浮かんだ。かりに殺人罪の時効なら、あと一年と七カ月あたり。だが、能海はそんな大罪は犯していない。微罪はともかくとして法廷に持ち込まれるような犯罪とは無縁で生きて来た男である。

人違い——それならわかる。十三年もの昔に起こった事件。辿りにたどってどうにか能海を割り出し、追い着いてきた。徹底して調べ上げた。だが、捜査側は出発点をまちがえていた——あり得ないことではない。しかし、と思う。葛を刑事として、刑事が容疑者を一流ホテルのレストランに招待して飲めやのめと、なるだろうか?

十三年の昔ならたしかに、能海は車・狩猟・クレー射撃には凝っていた。ついでに器具潜水にも。没頭といってよい。しかし……。

無言の女刑事の葛の眸が能海の脳に喰い込んでいる。いや、この女は刑事などではない。

「だいたいね、おれは年月日というのがだめなんだ。昭和が何年で終わったのか、いまは平成かもしらんが、何年なのか、面倒くさくてかなわんから、そういうのは放棄している。西暦ならなんとかなる。今日は二〇〇〇年の七月の何日かだ。何日あたりだろうで、生きている。今朝は何を喰ったかさえ、めったに憶い出すことはない。いや、出来ないといったほうがいい。

必要が無いからね、おれには、煩雑な過去は。どうしても必要なことは、予定表に書いておく」

「予定表はございますか？」

「昔のものはまとめて棄てた。いつだったか、もう何年も前のことだ。最近は必要がないから予定表は持たない。過去帳もね」

能海はバーボンを注いだ。

小出しでもいいかと、思いはじめていた。人ちがいなどとは思うまい。もともと難解な論争を求めていたのだ。艶と彩りを秘めた女に、飲みほうだいのアルコール。どちらにも飢えていた。早々と機会を見失って失意の中でうろたえるてはない。深く関わって葛とはこれきりでなくしたい。背後の組織とも。謀略であろうとなんであろうとこの雰囲気が糸の切れた凧となって消えてしまうのは、惜しい。

――十三年の昔に、おれは何をしていたのか？

葛を繋ぎとめるキーはそこにあると能海ににわかに焦りに似たものが出た。

その頃はたしか小説を書いていたはずだ。能海を破滅に導くことになった小説という魔物と格闘中だったはずだ。だが、一九八七年、三月十八日午後三時二十分と遠い昔のある瞬間に時間を限定されては、無力感が先に立つ。自力では時の流れをその瞬間に遡ることは不可能。

「能海さんは、そのとき、埼玉県の東松山市から東京の自宅に向かって車を走らせていました。車はトヨタ・クラウンです……」

「東松山市――ですか」
「憶い出しましたか？」
葛のものいいは正確なものになってきている。声は低い。冷静な表情になっていて笑みは消している。眸は能海から離さない。
憶い出したわけではないが、東松山市ならよく知っている。かつてクレー射撃場が在ったからだ。「吉見百穴」で知られる穴居人の遺跡の近くに射撃場はあった。崖全体におびただしい横穴がまるで鳥の巣さながらに穿たれていてその窮屈さに驚いた記憶がある。高い梯子がなければ自分の穴には出入りできないではないかと。当時は東京近郊ではクレー射撃場はそこしかなかった。週に一回かすくなくとも十日に一回の割合いでは通っていた。腕を見込まれて国体の射撃選手に出ないかと誘われたことがある。遠い、懐かしい記憶だ。
「いや、射撃場が在ってそこに二年ばかり通っていたが、ただ、それだけのことです」
「あなたは、その射撃場に来ていた国体関係の協会幹部から射撃選手にならないかと誘われたが、断っています。どうして、その誘いを……」
「強化練習のカネが続かなかった。それだけのことです」
当時、競技はイタリア製装弾を用いるのが主流であった。一回の練習で五百弾も費えばその額は尋常ではないことになる。空薬莢を持ち帰って弾をひとつひとつ手造りして通っている能海には希むべくもない。射撃競技は資産家でな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton